Trinity

キズナエピソード\_東山陽彩\_03

１２３４５６７８９０１２３４５６７８９０１２３４５６

１２３４５６７８９０１２３４５６７８９０１２３４５６７８９０

------------------------------------------

//ADV形式開始

//背景:陽彩の自室

//R18版の場合、冒頭にエロシーン

[とびお]

「ほら、ホットココア。

ちょっと疲れたし、甘いもの飲んで休憩しよう」

[陽彩]

「たまには気が利くじゃないか。

こくっこくっ……ぷはっ。

美味しい、落ち着くな」

[とびお]

「やっぱり、座るところは

俺の足の間なんだな」

[陽彩]

「だから、昨日も言っただろう。

このソファーはぼくのものだ。

そして、ここに丁度いい隙間を作るのが悪い」

[とびお]

「わかったわかった。

ふーっ。

勉強で疲れた頭に糖分は、最高の栄養だな」

[陽彩]

「疲れたのは、バカを教えるぼくの方だ」

[とびお]

「ハハ、相変わらず厳しいな。

でも俺はこの時間が好きだわ。

落ち着くし、楽しい」

[陽彩]

「…………」

[とびお]

陽彩はなにも言わず、

ずっとカップの中のココアを見つめていた。

[とびお]

「どうした？

なにか考え事か？」

[陽彩]

「まぁ少し……愛情についてな」

[とびお]

「なんだ、今度は道徳の時間か？

哲学者みたいなことを考えるな」

[陽彩]

「とびおのくせに、からかうとはなにごとだ。

そういうことは三角関数を解けるようになってから言うべきだ」

[とびお]

「ごめんごめん、

陽彩にしては珍しく難しそうな顔してたからさ。

どんなことを考えてたんだ？」

[陽彩]

「人とここまで触れ合うのは初めてなんだ。

まさか、偶然知り合ったとびおと

こんなに親密な間柄になるとは」

[とびお]

「俺だって、本屋で陽彩を助けたときは

こうなるとは思っていなかったよ。

事実は小説よりも奇なり、なんてな」

[陽彩]

「ぼくとの関係を、不思議なものだと捉えているということか……？」

[とびお]

「ははっ、わるいわるい、そんなに睨むなよ。

と言っても怖いどころか可愛さしかないけど」

[陽彩]

「もー、からかうな！

……だがこういう関係になって、

幸福を感じているぼくがいるのは……事実だ」

[とびお]

「お、そうなのか。

そういう本音は初めて聞いたな」

[陽彩]

「……しかし、それは他人と触れ合ってこなかった自分が

安心して触れられる対象を得たことで生まれた、

自愛の形でしかないのかもしれない。」

[陽彩]

「こうして2人で楽しく過ごしている瞬間も

ぼくはとびおのことを愛している、

と言い切る自信がない」

[とびお]

「そう……か……」

[陽彩]

「そんな不確かな感覚でに基づいている以上、

確かにぼくたちの関係は奇妙なものかもしれないな……。

さっき幸福だと言ったが、やはり撤回する。」

[とびお]

「……まーた陽彩は難しいことを考えてるんだから。

愛情とか感情とかはさ

そんな風に頭で考えなくていいんだよっ。なっ？」

[陽彩]

「…………」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

そのあと、俺は安心させようと笑って陽彩の頭をなでるが、

一番最初会ったときのような反応はなく

どこか少し不服そうな反応をするのであった。

そのまま彼女は腑に落ちない様子で、俺の家を後にした。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//3話終了